

公益社団法人 横浜市幼稚園協会発行  
 〒221-0055  
 横浜市神奈川区大野町1-25  
 横浜ポートサイドプレイス アネックス5F  
 電話 045 (534) 8708  
 http://www.kids-yokohama.or.jp  
 編集 横浜市幼稚園協会広報部  
 発行者 木元 茂  
 印刷所 合資会社横浜大気堂

# 協会報 浜私幼

教職員版

No.255

- ▼横浜市幼稚園教育研究大会 開催
  - ・シンポジウム要旨
  - ・分科会報告
- ▼2学期・3学期の研修会



## 第51回横浜市幼稚園教育研究大会 開催 「今だから考えよう! 幼稚園教育の本質を!」

平成26年2月1日(土) パシフィコ横浜国立大ホール・他

寒さも和らぎ、春の気配が感じられた平成26年2月1日「第51回横浜市幼稚園教育研究大会」が、一今だから考えよう! 幼稚園教育の本質を!—を大会テーマに、パシフィコ横浜国立大ホール他で、全体会及び分科会が開催された。

午前中の全体会は、例年実施していた県民ホールが改修工事により使用できないため、国立大ホールへ会場を移しての開催となったが、市内の幼稚園教職員の他、保育園関係者、保護者、一般申込み者など、3200名余りの参加者が集い、盛大に開催された。

開会式では、まず木元茂横浜市幼稚園協会会長が挨拶に立ち、「本日は、来年4月に施行される子ども子育て支援新制度について理解を深め、横浜の保育や子育てがより充実していくために、幼児教育の在り方や、幼児教育・保育の理念や方向性などについて皆様と考えていきたい」と述べ、さらに自身の入院体験にも触れながら、「来年4月に新制度が始まって子ども達が不安を感じないで生活ができるように、子どもと先生の間で親密な信頼関係を築いていくことが重要である」と述べた。

続いて、来賓を代表して鈴木隆横浜市副市長

から祝辞を頂いた。同副市長は「来年4月に幼児教育と保育に係る新しい仕組みがスタートします。新しい制度になっても子ども達の成長を願う幼児教育の目的は基本的には変わりません。横浜の子ども達を質の高い幼児教育によって健やかに成長させていくため、ご協力をお願いしたい。本日の教育研究大会を通して子どもの健やかな育ちと学びの視点から、改めて教育や保育に関して考える良い機会となることを願っています。」と述べられた。



木元 茂横浜市幼稚園協会会長



鈴木 隆横浜市副市長

引き続き行われたシンポジウムは、大豆生田啓友先生の司会により、「子どもや子育てにやさしい横浜をどう実現していくか」をテーマに、4名のシンポジストの先生方がそれぞれの専門的な立場から意見を述べた。

また、午後からは9分科会が開催され、それぞれの会場に分かれて、研究発表が行われた。





シンポジウム  
要旨



司会

玉川大学教育学部乳幼児発達学科  
准教授 大豆生田啓友 先生



シンポジスト

慶應義塾大学医学部小児科専任講師  
渡辺久子 先生



シンポジスト

白梅学園大学学長  
汐見稔幸 先生



シンポジスト

NPO法人 子育てひろば全国連絡協議会理事長  
奥山千鶴子 先生



シンポジスト

港北幼稚園・ゆうゆうのもり幼保園理事長  
渡辺英則 先生

大豆生田先生

子ども・子育て支援新制度は、子育てに関する戦後初めての大きな改革になるが、これには3つのポイントが示されている。一つ目は認定こども園・幼稚園・保育園共通の給付及び小規模保育への給付、二つ目は認定こども園制度の改善、三つ目は地域の実情に応じた子ども・子育て支援となっている。このように大きく制度が変わっていく中で、ただ制度の議論をするのではなく、根本に立ち返ってこれからの子どもをどう育てていくのか、子育てをどう考えていくのか、課題を浮き彫りにしながら、横浜の子育てを考えていきたい。

まずは、シンポジストの方々に、それぞれ専門的な立場から話を伺いたい。

渡辺(久)先生

私達の人生を司る指令センターの脳のいちばん深いところの土台がで

きるのは乳幼児期であるといわれている。その乳幼児期の発達を見守り、子どもの未来を幸せにできるのはお母さんと実感しないといけないと思う。

今の日本の社会は子ども達の育児状況をすごく苦しめている。この社会を作ってきた私達の責任だが、今日は子ども達のことを振り返る機会にしたい。

「子どもは大人の親」、子どもにとってはわくわくするカイロスの時間が人生の土台を作る。カイロスの時間とは自分自身の言葉にならない主観的な時間である。主観の世界がその人の幸せを掴むという、まったく新しい心理学と精神学の観点だと思う。本当の人間の幸せを考える新しい現代の精神学・心理学を解明しなければいけない、それが乳幼児精神学である。人生には3つの大切な時期があり、胎児期と乳幼児期と思春期である。胎児期はまさに母親の胎内にい

る時期、乳幼児期は2歳前後の時期で環境次第、12歳ころの思春期はカイロスに最も守られているべき時期。人の生きた瞬間は紛れもなく、身体記憶となって私達の心の深い部分に貯められていく。

人は支えあい響きあう存在である。人という字は小さなものが大きなものを支えている。私達にとって子どもは未来であり、子どもは日本の未来の希望を支えるとても大事な存在である。大人は子どもから学ばなければいけない。

子どもの脳が知的に発達する幼児期と思春期に、危ない汚いうるさいと言ってしまふ。あぶないの“A”、きたないの“K”、うるさいの“U”、“AKU”の悪戯が子ども達の野性を抑圧している。子ども達の野性が抑圧されていて、乳幼児期の0・1・2歳に野性をうまく受け止められなかったときに集団行動に遅れがでる。日本は研究が遅れているのでこれを

発達障害とってしまうが、これは発達障害ではない。0・1・2歳のときに安心して生きていく瞬間の積み重ねをしていないと、子どもの行動系の発達に遅れが出てしまう。たとえば震災のあった地区で屋内の遊び場が作られたが、現代の子どもは自然の中で自由に遊べない等、子どもの遊び方がおかしいと思う。もっと子どもに心地良い社会をつくり直さないといけない。程よい失敗や伸びやかなそういうものを作らないといけない。子ども達がきらきらとするわくわくする今という瞬間を積み重ねていく努力を奮起していきたい。

### 汐見先生

今日の全体会のテーマは「子どもや子育てにやさしい横浜をどう実現していくか」ですが、子どもや子育てにやさしい家庭、家族の在り方、子どもや子育てにやさしい保育とは何かとか、子どもや子育てにやさしい地域とは何かを考えてみたい。

心理学者の柏木恵子先生の著書の中で、日本の子育ての特徴はおせっかいやきであることだそう。それを今の環境、今の子育て条件と合せて考えていかなければいけないと思っている。なぜ日本の子育てがおせっかいやきなのか、3つほどその理由があると思う。

一つ目は、日本人は子どもの気持ちを察する、感じる能力が高く、そういうふうになってきている。かわいそうとか痛いだらうとかを先に感じ取るために、あまり考えないで口を出したり、手を出してしまう。

二つ目は、孤立した育児で自分が頑張らないといけない、そういう環境が進んでいるということと関係があると思う。今、子どもが育つ環境は昔と質的に変わってきている。育児を取り巻く環境が全く変わってしまったのに、それに見合う施策が準備されていない。

三つ目は、なぜ子どもに対して口が出て、手が出てしまうのか、おせっ

かいなのかである。この世の中で、子どもをどういうふうに育てるかというときに、子どもを市民として育てる感覚が今の日本の中では弱い。市民というのはどういう人間かという、人間は一人では幸せになれない動物であるところから来る。「ひと」というのは、人間と書く。人間とは人と人との間、人間関係のことである。人間関係が豊かでないと人間は人間になれない。

今、新しい横浜を作っていくかではなくてはならないときに、子育てに一生懸命になっているときに、子どもに対して全員で過干渉になってしまう。そういうところをどうほぐしていくのかということに挑んでいかなければ、本当に子育てでやさしい横浜を作るということにはいけない。私達が保育のことを考えるときに、そのことを自分達のテーマとしていかなければいけない。

### 奥山先生

地域の親達と共に居場所を作って、それが親達の支え合いだけでなく、子どもの育ちにも役に立つと分かり、平成12年に商店街の空き店舗で、親子の広場「びーのびーの」というものを地域の親達で立ち上げた。これが「びーのびーの」の原点だ。

就学前の家庭に、地域子育て支援拠点について聞いたところ8割が知っていたが、利用しているのは3割だった。幼稚園や保育園に入る前の子育て家庭の方がこの事業を知っていて、ここから巣立ち幼稚園や保育園への連続ということも一緒に考えていきたいと思っている。

お母さん達は素敵なお育てをしている。ただ、幼稚園や保育園に入るまでは、所属感がなく自分のいる場所が見つからない。本当にこの子育てでいいのかという戸惑いを感じられ、幼稚園、保育園に行くまでは長いと感じている。その出産から集団につながるまでの間を、サポートしたいという活動をしている。密室育児

とか先回りとか、いろいろなことをせざるを得ない、それが今の子育てだと思う。0・1・2・3歳児は子どもの成長の大事な土台作りの時期で、親の影響力が強く、そこに係れる私達の子育て拠点は非常に大きな意味を持つと思う。

また、当事者だけではなくて、学生や地域の方、ボランティアの方をたくさん受け入れて、多様な地域の中で子育てをするのも拠点広場の役割かと思う。ちょっと不安なことを出せる場所、弱音をはける場所であり、すぐに地域に入れない家庭の中間的な役割をする試みも役割の一つと思う。

子ども達にとって横浜で育つということは、故郷になっていくことであり、生涯心の記憶の土台になるということを見ると、親達が子どものふるさとづくりを一生懸命やっていかなければいけない。外で自由に遊べない今の社会環境の中で、どうしても口を出したり手を出したりになってしまう。それを親だけで解決しようとするのは厳しい状況にある。制度として仕組みとしてどうしていくのが大事なことである。市の教育委員会の50メートル走のデータで、小学校1年生の中では差が大きい、これが中学生になるとあまり差がなくなってくる。これは小学校に上がるまでの体力の差が大きいということで、幼稚園、保育園、子育て家庭が全体で考えていかなければいけないことだし、私達は、中学に上がる子ども達のことを意識して、幼児期の子育てをしていかなければいけないことを改めて感じる。

本当に子ども達は多くのことを気づかせてくれる存在なので、もっと子ども達に係る私達が、社会に対し、これでは子どもが育たないということを発信していかなければならないし、自分達の現場でそれを解決していくための色々な方法を生み出していきたい。



### 渡辺(英)先生

家の中や地域で子育てが難しい、どう子育てをしたらいいか分からないという人達が、幼稚園、保育園に入ってきたときに、そこでどんな保育をすればいいのか、幼稚園、保育園に入ったから親は救われるのか、これがどういうことなのかを今問われている。横浜は待機児童が多く、保育園に入れないことが大きな問題になっている。横浜型の預かり保育をする私立幼稚園が増えているが、預かったから、その子ども達は本当に元気になるのか、すくすく育つのか、新しい制度は子ども達にとって幸せな制度なのかを、新しい制度のことに触れながら、子どもはどう育っていくか、幼児教育はどう子どもを支えていくべきかについて話したい。

新しい制度は幼稚園と保育園を一緒にし、日本の子ども達を一緒に育てるという制度で、その理念としては、子ども社会は希望に輝く未来の力であり、我が国の重要な未来への投資であるとし、さらに社会全体で取り組む最重要課題の一つであり、親育ちの家庭を支援していくことも大事であるとしている。親は周囲の様々な支援を受けながら、実際に子育てを経験し成長していく。その経験をしていない人達をどう支えるかということも課題である。行政が子ども子育て支援を、質、量ともに充実させ、さらに家庭や学校や地域などの全ての構成員が協働で進めていくことが重要である。これらが新しい法律の目指そうとする子ども子育ての社会

である。

法律的には幼稚園が学校教育法、保育園が児童福祉法だったのを一本化し、新しい制度では、9～14時までの幼稚園の部分は学校教育法で、0～2歳と預かり保育の部分は児童福祉法でと、両方を一緒に行う。新しい制度の基で子ども達が本当に幸せになってほしいと願う。

幼稚園・保育園に入って子ども達は幸せだろうか。皆で一緒のことをやりなさいということも大事なこともかもしれないが、単純に一緒にできるようにすることが本当に保育なのか問われてくる。本当は一人ひとりが大事にされ、それが自己肯定を生み、自己肯定ができてくるからこそ、人に共感できる。自分勝手ではなく、人の意見を聞きながら自分の意見も言い、知恵を出し合って、そこに学びが生まれてくる。私達がそのことを深く学び、自分はどうしたい、相手はどうするというような環境と保育の関わりに一生懸命取り組み、そういう世界を作っていくことが大切だ。

幼稚園で一人ひとりの子どもが大事にされ、そこにかかわる保護者や地域の人子どもを大事にしようとする子ども中心の地域を作ろう、人と人を繋いでいく、地域のサポートセンターとなり、子どもの居場所を作ろうと取り組むことも重要なことである。また、園でも人と人とを繋いでいったり、園の中での人との絆を深めたり、親子関係を深めていったり、子どもの遊びを園の中で充実させていったりと、本来的に園の担う役割は大き

い。ただ子どもを預かるだけでなく、子ども達が幸せになるために幼稚園の本来の役割は何かを今問われている、そういう形がきちんとできる制度になるように、これから横浜市の行政や議員、幼稚園関係者、子育て支援の関係者が考えていかなければいけない時期に来ていると思う。

### 大豆生田先生

それぞれの先生方から現在の問題点や子どもの育ちの大切なお話を伺った。最後にそれぞれのお話を受けて、一言ずつお願いしたい。

### 奥山先生

乳幼児の広場では、今日先生方にご助言頂いたように、わんぱく小僧を作らなければ社会は良くならないと思っている。それからカイロスの時間だが、広場ではなにかイベントをやるのではなく、自由に一日を過ごせる暮らしの場として、丁寧に親子関係に係っていくことだと思っている。汐見先生が言われたように、自分の子がうまく育ってほしいと思ったら、一緒にいるその子も育たなければ良い地域にはならない。そう考えると、広場は小さな地域であると思う。子育て家庭が第1子のときには、まるで子育ての経験がない親が75%というデータがある。なので子育て広場や拠点は、安心安定の環境の中で、アクセルとブレーキを試せる子どもの放牧場であり、お母さんにとっても時間を忘れてゆったりできる時間を、少なくとも広場にいる間は作っていきたいと思う。

自分も新制度の委員になっていて、今ここで話し合っているようなことを新しい制度に組み込むことはなかなか難しいと思うが、子どもが育つということについて、簡単なものでいいので共通理念というものを作って、子育て家庭や幼稚園や保育園、認定こども園、子どもに係る人達が共通して認識し、国民が皆認知できるように国でも考えてほしい。

横浜でもわかりやすいキャッチフレーズを作り、そこに向かって進んでいくということは、お金がかからなくてもできることなので、そういうことも議論できるといいと思う。

### 汐見先生

これからの保育は、意識性が必要になっている。考えてやらないといけない。それは子ども達一人ひとりの思いと自由をいかに保障する保育にしていくかということだ。かつて子どもは自由で、自分で決められた。しかし最近では親が善意かもしれないが先取りしてしまい、自分で決められる世界がどんどん減っていく。子ども達の自由をどう保障していくか、そのための意識性について厳しくチェックするようなことが必要な時代に入ってきている。3つの提案をするので是非形にしてほしい。

一つ目は、横浜版の育児保育要領を作ってほしい。国から幼保連携型認定こども園の保育要領が2月に出されたが、資格も3つになり幼稚園教諭、保育士、保育教諭となる。管轄も3つになり、どんどん新制度になって複雑になっていく。仕方のない面もあるが、実施が基礎自治体に移ってくることになり、横浜市がやるようになる。そうだとしたら横浜の子どもにはこう育ててほしい、横浜のお母さんにはこう育児してほしい、横浜の幼稚園やこども園はこういうふうにしよう、ということを書いた横浜版の保育要領を作りたい。幼稚園、保育園、こども園が地域のお母さんにとってなんでも相談できる拠点になって、高齢者や障害を持った人も自由に入出できる地域の交流拠点になっていくように書いてほしい。

二つ目は、今、幼稚園、こども園、保育園を別々のところが管理しており、理念と現実がマッチしていない。私は幼稚園もこども園も保育園も全部文部科学省が管理すべきだと思っている。子どもを育てるとい

教育である。0歳からの市民教育なのである。横浜では教育委員会の一元管理に移していただきたい。

三つ目は、現に子どもは本当に育っているのかという問題は切実だと思う。保育の質、本当に一人ひとりの心、自我が生きていて良かった、夢がいっぱい膨らんできたというように、僕も私も大切にされてきたという保育になっているかどうか、お金がいくらかかってもやらないといけない時代は来る。もう少し今より厳しい保育のチェックシステムを作ってほしいと思う。

この3つを、横浜が全国に先駆けてやって、横浜は本当に子どもがやさしく温かい環境の中で育っているという制度システムを作っていただきたい。

### 渡辺(久)先生

日々病んでいく子ども達の病院で仕事をしている。そして残念だが、どんなにテクノロジーが発達しても障害のある子は産まれる。そして文明が発達すればするほど、子どもが真の意味で育ちにくくなるデータがたくさん出ている。テクノロジーの発達は子どもの心や体に有害なことが一杯あるということも事実である。

命を守る現場で、お父さんお母さんが守るものとして、力とか権利をもっと知っておくべきである。命を守ることは非常にシンプルだ。安心して安全で生き活きとして楽しくないといけない。日本人がいま気をつけなければならないのはラッピングペーパーでない、生きることの本質である。本質をぶれないで持っている人はたくさんいる。本当に子どもが幸せになるためには、ぶれない人達とつながってほしい。その人達と私達のどこが共通かという、子どもの暗い表情が本当に明るくなった時にやったと思う、それが私達のカイロスの世界なのだ。

今、大企業では、辞令を幼い子がいる場合断ってもいいということも

増えてきた。安定できる場所で、安心できる人との間での子どもの暮らしが守られる社会を作らなければいけない。赤ちゃんが生きている世界の本当のところを、お母さんは直感的に分かっているので、生き活きた瞬間を大事にし、それでいいのだという本物の子育てをしなければならない。

家族の信頼関係のオーケストラの中で、保育、ケア、育児がある限り子育ては大丈夫である。子育ての原点はものすごく地味で、シンプルで、ささやかで聡明で、スモールでサイレントである。子どもに関わる人達を守っていく力を育て、本質を見抜くことができるお父さんお母さん保育者が増えてほしい。

### 渡辺(英)先生

制度は変わっていても、目の前の子どもとどう向き合うかは、すぐにでもできる。そのことが保護者に伝わっていったり、その子が変わっていくことを実感したり、保育者の専門性を高めていくために、子どもと向き合う中で学ぶことは大事である。皆さんが目の前の子どもを大事にしながら、その子どもに対するやさしさが地域に広がっていくことにより、横浜の街全体が子育てにやさしい街になっていくと良いと思う。

(要旨まとめ 広報部)



## 分科会

## 第1分科会 特別研究委員会1

横浜ワールドポーターズ イベントホールB

## 「保護者支援としての発信」の工夫で保育内容をもっと伝えよう! ～子どもの育ちを支える保育内容の充実～



助言講師 ● 玉川大学教育学部乳幼児発達学科准教授 大豆生田 啓友 先生

大豆生田先生をアドバイザーに迎え、第1分科会では「園から発信するお便り」「園でのトラブルやクレームからみる保護者支援のアプローチ発信」の二部構成で行われた。各テーマにおいてそれぞれ二つの幼稚園の発表者からの話があり、それをもとにディスカッションを行った。

発表者のクラス便りでは、カラーコピーで保護者の読みたくするような文章とコメント、興味が湧くような題名をつけ、文章は短く読みやすしたり、日々の保育活動の写真を載せたり、子どものつぶやき、流行している遊び、子ども同士のトラブル内容等、普段子どもの生活の様子がわかるように工夫されていた。

また、クレームやトラブルについては

二つの事例をあげ、どのように対応したのかを聞くことが出来た。子どもの様子等他のクラスの先生にも発信し、幼稚園全体でフォローし、他の先生の意見を聞いたり行動面でも教えてもらえるようにすると、より良く保護者に様子を伝えることができたとのことであった。

ディスカッションでは4～6名のグループに分かれて、様々な幼稚園の発信の方法や、保護者対応を聞くことができた。

幼稚園で生活する子ども達の様子を見ることができる機会は限られている。保護者参観や運動会、発表会等の行事だけでは、いつもと違う雰囲気から子ども達は緊張してしまい、普段の様子を見ることはなかなか難しい。入園前までは親子が一日中共に過ごし、保護者は子どものすべてを知ることができていたのに、入園した途端に見えな

い部分が増え、心配になる保護者は多い。その不安や心配をなくすためには、保護者と保育者が連絡を密に取り、子どもの成長過程を伝えていく必要がある。どのような方法であれ、幼稚園での様子を多く発信し、保護者との信頼関係を築くことができるよう努めて行きたいと感じた。

大豆生田先生がお話されていた「先生たちが元気でないと親も子どもも笑顔になれない」という言葉がとても印象的で感銘を受けた。

(愛和太陽幼稚園 早川 美穂)



## 第2分科会 特別研究委員会2

ヨコハマジャスト1号館 8Fホール

## ○○ちゃん／くんの育ちの物語 ～遊びの中の育ちを探る～

助言講師 ● 青山学院大学教育人間科学部教育学科教授 小林 紀子 先生



第2分科会では、先生方がどのように子どもの育ちを追っていき、理解を深めていったのか、3名の先生方に質問形式で話を伺うことから始まった。

それぞれ対象としている子は違っても、保育者として気になったり、共感したりするポイントは同じであり、話し合うことで視野が広がると共に保育に勇気がもたらえたとおっしゃっていた。

○○くん/ちゃんの育ちの物語(保育記録)を作成するうえで、育ちのプ

ロセスが見えやすい子とそうでない子がいるが、じっくり観察することでその子を理解するための糸口やヒントを見出すことができると気付かされた。事例の発表では、3名の先生方からは子どもの遊びの中の育ちのプロセスを常に見守り、愛情をもって保育されている姿が伺えた。また先回りして保育者が遊びを提案するのではなく、子どもから発信されていることを遊びに結び付けたり、橋渡しをしたりすることも保育者の役割なのではないかと感じた。

助言講師の小林紀子先生からは、

子どもの育ちのプロセスが理解できる保育過程の記録を残し、仲間と共有することが大切であるとお話があった。

子どもの育ちは日々の積み重ねの中にある。今回の研修で学んだことを活かして子どもの育ちを丁寧に追っていきたい。(杉之子幼稚園 小宮 裕子)



第3分科会 特別研究委員会 3

鶴見大学会館メインホール



# どの子にもうれしい保育の探究 ～障がいのある子どもや関わりの難しい子どものいる保育実践を考える～

助言講師●國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授 野本 茂夫 先生

第3分科会では、「どの子にもうれしい保育」をテーマに2人の先生が実践事例を発表した。

事例では障がいのある子どもや関わりの難しい子どもを中心に、保育者の悩みや、クラスの友がその子を仲間と意識することで変化していく姿、行事を通してクラスの一員として参加し、成長した姿が紹介された。

野本先生からは助言として、枠の中に収め揃えようとする既成のイメージの枠組みを広げ、他の子ども自分を出せるような、どの子にもうれしい保育の提案があった。

保育の場は集団という仲間の暮らしの中で相互に関わり合いながら育ち合

う。「合い」の保育は「愛」の保育という言葉が印象に残った。障がいのある子どもを仲間に入れようとする支援ではなく、仲間になりたくなる支援が大切であると感じた。

保育者との関わりが主であった子どもが、徐々にクラスの子も達と関わるようになっていき、子ども達の力によってその子もまわりの子ども達も変わっ

ていく。そういった事例を聞き、子ども達を主体にしながら、クラス作りをみんなでしていく支援をすることが保育者の役目であると感じた。そして「その子らしさが解ってもらえる子どもの保育」を目標に、どの子にもうれしい保育を目指していきたいと思った。

(山王台幼稚園 竹内 友梨)



第4分科会 西支部

横浜ワールドポーターズイベントホールA



# たくましく しなやかな 身体を育てる ～幼稚園・保育者が今できること～

助言講師●東京大学名誉教授/白梅学園大学学長 汐見 稔幸 先生

第4分科会では、汐見先生を助言講師に迎え、「たくましく しなやかな 身体を育てる」をテーマに“幼稚園としての役割は何か”という研修・研究活動の内容が発表された。

西支部の中で「子どもの体力や運動面で気になること」について話し合いが行われ、子ども達を取り巻く物的、人的、社会的環境が、子ども達に大きな影響を与えていることが分かった。子どもを取り巻く環境調査、保護者の協力を得ての実態調査を行い、さらに遊びの中で見られる子どもの動作を動詞によって表わし、その動詞を分類、評価したものをデータ化して集計表やグラフとして示された。これにより現在の子どもの環境や

身体の実態をより分かりやすく把握することができた。

そして、「しなやかな身体」とは、どのようなことを明確にし、遊びの中の育ちを大切にしながら、将来様々な文化を担っていくことのできる「しなやかさ」を育てていく必要がある。また、日々の生活の中で、子どもを育てるにも、子どもが育つにも、育ちにくい環境になっていくことも否めないが、保育者は子どもの遊びの質や環境について定期的に話し合い、保護者にも幼児期の遊びの重要性を発信しながら、共通理解を確認し、「たくましく しなやかな 身

体を育てる」ことの実践を行っていくことが大切であると締めくくった。

以上、西支部の発表及び汐見先生の助言を受け、私達保育者が「たくましく しなやかな 身体を育てる」ための保育環境を整えていく一つの指標になった。

(飯島東幼稚園 五十嵐 恵理)



第5分科会 港南支部

総合薬事保健センター多目的ホール

3歳児の言葉による繋がりのエピソード

助言講師 ● 雑誌「ちいさいなかま」口頭詩選者/口頭詩集「ひなどり」編集委員 上野 聡子 先生



日々の保育の中で“子どもの言葉っておもしろいな”“どうしてそんな言葉がでてるのかな”と感じる事がたくさんあり「子どもの言葉」をテーマにしたこの分科会に参加した。

この分科会では、3歳児の子ども達が発する言葉の裏側にある子どもの心のありようをどう捉えるのか、そしてその心の動きに保育者はどう寄り添って保育を進めていく事が必要なのかについて発表が行われていた。

「子どもの言葉」について4園の先生方による実践報告と、子どもの言葉に耳を傾け採集する口頭詩を父母らと繋がりながら集めている上野聡子先生によるお話があった。

港南台幼稚園の今村先生は鬼ごっこを決める事例を通して、一見す

ると「それはずるいんじゃない?」と大人の感覚で声をかけてしまいがちな事例を大人のものさしで物事を捉えるのではなく、そのやりとりの中の子どもの個々の育ちに目を向け成長を認める大切さを発表された。春日野幼稚園は言葉を通してイメージを共有して遊ぶ子ども達の事例を通して、その姿をその時のその場面だけのものとして捉えるのではなく、その姿は日常生活のどんな積み重ねや経験から生まれたものなのかを検証した。安部幼稚園は1人の子どもの些細な仕草や言葉を中心にその子の前後の様子を振り返る事で、その子の育ちの小さな変化や、友達との関わりをもう一度捉え直す必要性を話した。そして金井幼稚園は子どもの言葉の裏にある心の動きを担当が読み取ろうと試行錯誤する事で、じっくりと時間をかけて担任と子どもとが信頼関係を紡いでいく様子を

事例を通して発表した。

普段の保育の中で何気なく聞いている子どもの言葉。それは、あまり深く考える事なく「可愛いな」ですませてしまう事が多くあったが、その言葉はどうして発せられたのか、その時その子はどんな気持ちでいたのかという事を振り返り、考える事で、より深く子どもの成長を捉える事ができるのだと感じた。(金井幼稚園 小出 悠)



第6分科会 磯子支部

ワークピア横浜

伝承あそびの素晴らしさを知り 子どものあそびをひろげよう

助言講師 ● 横浜女子短期大学准教授 佐野 眞弓 先生

助言講師 ● 横浜女子短期大学講師 本田 幸 先生



第6分科会では伝承遊びについて“遊びこむ工夫”と“遊びの種類”の2グループに分かれて研究が行われ、各グループから実践報告がなされた。

初めのグループでは、“むっくりくまさん”と“どんどんばしわたれ”の遊びの様子を写真や映像を使い、遊びこむ過程や「困った事」への保育者の援助と遊びこむためのポイントが三点示

された。一つ目は歌、遊びの約束を覚える、二つ目は毎日少しずつ、少人数でも行う、三つ目は子ども達が慣れてきたら保育者は遊びから少しずつ抜けていくという事である。

次のグループでは、参加者も遊びを体験した。“あんたがたどこさ”のわらべうたに合わせ手のひら、肘、肩と叩く遊びは、研究委員の先生方の息の合った見本に会場から笑いやため息が起きた。実際にやると中々難しく、あちこちで苦戦する参加者の姿があり、会場は和やかな雰囲気包まれた。

今回の発表を聞き、伝承遊びの良さは自由度の

高さにあると感じた。特別な決まりが無い為、子ども達の状況に合わせて段階を追って遊ぶことができ、子ども達にこうなって欲しいという保育者の思いを反映しやすい。年齢や成長に合わせてルールを変えて遊び続けることができることも魅力であり、保育に生かしたい。

(汐見台中央幼稚園 角田 有紀子)



第7分科会 緑支部

ワークピア横浜



# 楽しい「造形かがく遊び」 ～身近な「空気」「水」「光」「しかけ」などを遊びに取り入れて～

助言講師 ● 造形かがく遊び作家 立花 愛子 先生

緑支部では身近にある環境を取り入れた「造形かがく遊び」を、講師の立花愛子先生の指導のもとに一年間をかけて行ってきた。子ども達にわかりやすく“かがく”を教え、一人ひとりにその「すごさ」が共感できるように、との目標をたて、実践したものである。

最初に助言講師、立花愛子先生より造形科学あそびとは、造形あそびとかがくあそびを一緒にしたもの、との説明があり、幼児期の子ども達が、手を動かし頭を動かすことで実践する「造形かがくあそび」では身の回りの環境を意識すること、制作していく時点において段階ごとに変化を見つげられる造形を行うこと、工夫余地があるもの

を提供すること、の3点が重要な留意点としてあげられた。

その後、ビニール袋等を使用した「空気」、紙コップ、ストロー、輪ゴム、糸等を使用した「しかけ」、にじみ絵を中心として用いて行った「光・水」の実践報告をそれぞれ発表し、その発表ごとに会場には実際に使用した教材が用意され、参加者全員が手に取りな

がら、子どもの行ったカリキュラムと同調し、体験する形で展開された。ただ受け身となって聞くだけではなく、実際に体験し、実感できる形での発表であったため、各参加者はその内容をより理解しやすい形態の、有意義な発表であったのではないかと考えられる。

(中山幼稚園 野末 晃秀)



第8分科会 都筑支部

関内ホール小ホール



# 子どもの心を理解する ～子どもの発するサインから見えるもの～

助言講師 ● 白百合女子大学講師/東京ユング研究会相談室カウンセラー 早乙女 紀代美 先生

この研修で、「自分は自分で良い」「ありのままの自分で良い」という言葉を何度も聞いた。もちろん子どもの自己肯定感に通じる話の中でだが、自分自身に言われているようにも感じられ、心に響いた。

早乙女先生の話によると、子どものタイプを二つに分けると、心のエネルギーや興味関心が外に向いているか、内に向いているかにより外向的と内向的に分けられる。それは、どちらが良い、悪いではなく、表れ方、表現のタイプが違うだけという。又、生得的なもので遺伝ではないと聞いた。日本の社会は、外向的なタイプが良いとされる風潮がある。例えば、「子どもらしい」というと、明るく活発で素直

等と外向的に捉えがちだが、本来は、子どもそのもののことを指す。私達保育者は、子どものありのままを受け止めることが重要であると感じた。

その他、兄弟関係の話では、上の子、下の子により特徴が違うことや、発達障害の子どもへの言葉掛けの工夫、保護者のケアについての話も興味深かった。

保育者は、子どものタイプを知り、心を理解することが必要である。そして、人生の土台となる幼児期に、「あ

なたはあなたのままで良い」とその子自身を認め、受け止めていくことを忘れてはならないと感じた。

(育和幼稚園 中田 佳世)



第9分科会 戸塚支部

かながわようちえん会館



## 表現の姿が響き合う場づくり ～表現の姿の可能性を広げる保育～

助言講師 ● 関東学院大学人間環境学部 人間発達学科准教授 照沼 晃子 先生

「収納」「園庭」「興味関心」「遊び」という表現活動の切り口から、各グループの考察・事例発表が行われ、次のような子ども達の姿や気付きがあった。

様々な”素材”は、子どもの実態や要求に合わせた環境構成をすることで、子どもの興味・関心が表現活動へと向かったり、ごっこ遊びへと発展する姿が見られた。発達段階により、素材への関わり方や遊びへの発展の仕方が異なるが、保育者が子ども達の表現を受け止め、共感することで、子ども達自身の「もっと表現したい!」とい

う気持ちが高まることがわかった。型にはめた(見本のある)表現だけではなく、それぞれの個性を出した表現活動となるように、保育者が援助したり、見守ったりすることで自然と生まれる表現や、子ども達同士の気付きがあり、新たな表現や遊びへと発展していく姿が見られた。

まとめとして、適切な環境構成の下、子どもが物に命を吹き込む瞬間を見逃

さずに捉え、共感したり見守ったり、時には援助しながら保育者が寄り添うことで、子ども達同士から生まれたイメージが響きあい表現が広がることがわかった。保育者は子ども達の表現活動の素晴らしさを伝え合い、語り合うことで、表現の可能性を広げていくことが大切である。

(相沢幼稚園 下笠 愛)



### 2学期・3学期の研修会

名称	開催日	テーマ	講師	会場	参加人数	
第2回 教員研修会	平成25年 10月23日(水)	第1分科会	書店「読書のすすめ」代表・NPO法人 読書普及協会理事長 清水 克衛 氏	西公会堂	276名	
		第2分科会	一人ひとりがかけがえのない命 ～一つの命の誕生にもさまざまなドラマ～	映画監督 豪田 トモ 氏	鶴見公会堂	253名
		第3分科会	障害があるからこそ普通学級がいい ～小学校での実践を通してクラスに配慮が必要な子がいる保育を考える～	ともいき教育相談室・学習教室 片桐 健司 氏	開港記念会館	417名
園長設置者 研修会	平成25年 12月13日(金)	食物アレルギーとアナフィラキシー	横浜市みなと赤十字病院アレルギーセンター アレルギー専門医(小児科) 磯崎 敦 医長 アレルギーセンター保健師 兼松 直子 氏	かながわ ようちえん会館	94名	
教育・経営 研究委員会 講演会	平成26年 1月28日(火)	こどもこそミライ ～まだ見ぬ保育の世界～	監督 筒井 勝彦 氏 りんごの木 青山 誠 氏	神奈川公会堂	121名	
園長設置者 研修会	平成26年 3月14日(金)	子ども・子育て支援 新制度における研修会	文部科学省初等中等教育局 幼保一体プロジェクトチーム専門官 相原 康人 氏	かながわ ようちえん会館	150人 (予定)	

編集後記

春の訪れが五感を通して感じられる頃となって参りました。

平成25年度も最終月を迎え、この一年で大きな成長を見せてくれた子ども達との思い出が蘇ります。(残された日々有終の美を飾るべき努力を持って、進学、進級により自信がもてるよう導いてあげたいですね)

さて、2月の第51回横浜市幼稚園教育研究大会は、約3,200名の教職員、保護者などが集い、午前中のシンポジウムでは、「子どもや子育てにやさしい横浜」をテーマに四名の専門家の先生方より幅広い観点から意見を聞くことが

できましたが、乳幼児期の教育として大切なキーポイント、社会情勢により移行される幼児教育新体制の現況や課題などが分かり易く伝わってきました。午後からの9つの分科会においても、各支部の発表に教育資質向上の努力が窺え、参加者から良かったという感想が得られました。研修部の企画に感謝します。

今後、平成27年度から始まる新体制に対峙し、永年に渡り幼稚園が培ってきた幼児教育をしっかりと踏襲し、より磨きをかけるべく努力を横浜から発していきたいですね。

(広報部 小泉 義右)